

広島大学 高等教育研究開発センター 大学論集
第45集 (2013年度) 2014年3月発行：49-63

ブータンにおける大学入学者選抜に関する一考察

—選抜の制度的枠組みと実態—

南部 広 孝

ブータンにおける大学入学者選抜に関する一考察

—選抜の制度的枠組みと実態—

南部 広 孝*

はじめに

各国の教育や社会を理解しようとするとき、大学入学者選抜制度のしくみやその実態、改革の動向などはその重要な手がかりとなる。なぜなら、現代では多くの国でそれが教育制度全体のなかで鍵になる位置を占めており、そのあり方が高等教育のみならず初等・中等教育に対しても大きな影響を与えているからである。すなわち、一方では、経済・社会のグローバル化に伴い国際競争力の強化が国家的目標となる中で、高等教育で受け入れるべき「優秀な」人材とは何か、そしてそうした「優秀な」人材をいかにして選抜するのが大きな課題となっている。大学入学者選抜制度はまさにこうした問いに対する各国での解答を示すものである。他方で、高等教育を受けることは社会的成功の第一段階であるという意識が広まるとともに、国によって程度の差はあるにしろ、中等教育以下の成功が高等教育への進学に結びつけられ、その結果として初等・中等教育のありようが大学入学者選抜によって方向づけられることになる。この傾向は、わが国や中国、台湾、韓国など東アジア地域で顕著に見られるのは周知のことだが、他の地域でも同様に観察することができよう¹⁾。

とりわけ後者の点について言えば、「国民総幸福」(Gross National Happiness, GNH)を掲げて国家建設を進め、近年グローバルなネットワークとの関わりを強めつつあるブータン王国(以下、ブータンと略)も例外ではない。例えば、やや古いデータではあるが、1997年から1998年にかけてフィールドワークを行った先行研究において、その当時の若者の意識として「多くの若者にとって、成功とは大学に進学し、国家公務員となり、願わくば『ダシヨ^マ』になることを意味する」と指摘されている(上田, 2006年, 189頁)。ダシヨとはブータンで国王から授けられる爵位である。また2009年に公表された第10次5ヵ年計画においても、同国で失業が多い理由として、最も高い教育を受けた者が望む公務員職や公的企業での雇用が限られ、若者の就職に対する期待と現実の労働市場との間にミスマッチがあることが挙げられている(Gross National Happiness Commission, 2009, pp.78-79)。こうしたより高い教育を受けることが社会的成功の第一歩であるという認識は、初等・中等教育の普及が進むにつれてより多くの生徒を巻き込むこととなり、ブータン社会における大学入学者選抜の重要性をますます高めることになっている。ブータンを訪れると、試験前には、教科書に目を落としながら登校したり校庭でノートを見直したりする生徒の姿が見られる。

しかしながらわが国では、大学入学者選抜制度を含むブータンの高等教育に関する研究蓄積はほとんどない。同国の高等教育については杉本(2000)が1990年代後半までの歴史的変遷とその時点

* 京都大学大学院教育学研究科准教授

での概況をていねいに整理し、また南部（2012）は高等教育の概要と近年の改革動向についてまとめているが、どちらもより具体的な制度の分析にまでは踏み込んでいない。一方、上田（2006）はフィールドワークをもとにブータンの若者の意識について明らかにしているが、その前提として存在している高等教育制度に関する説明は限定的である。

以上をふまえて本稿では、ブータンにおける大学入学者選抜を対象とし、制度的枠組みを整理するとともに選抜の実態を合格者に関するデータにもとづいて具体的に検討することを通じて、その特徴を明らかにすることを目的とする。ブータンでは、1999年にインターネットが導入されたことに象徴されるように20世紀末から世界的なネットワークとの接続が図られ、2008年には憲法が制定されるとともに国民議会選挙が実施されるなど、「近代化」に向けた国家建設が近年急速に推し進められている。そのようなブータンにおいて大学入学者選抜がどのようになっているのかを明らかにすることは、ブータンの教育や社会をより深く理解することに寄与するとともに、国や社会のあり方と高等教育制度との関係について理解を深める一助にもなると考える。

本稿は研究方法として、政府文書や政府刊行物の検討とともに、現地での観察及びインタビュー調査の実施、それからホームページ上で公表されている合格者一覧を手がかりとしたデータ分析を用いている。なお、政府文書・刊行物の多くは同国政府のホームページ上から入手しているが、これはたんに関連資料が容易には手に入らないためばかりでなく、同国が英語を準公用語的に使用し、しかもインターネット上でこうした文書を積極的に公開しているという状況があるからでもある。

本稿の構成は次の通りである。まずブータンにおける高等教育の歴史の変遷と概要についてまとめる（第1節）。続いて大学入学者選抜制度の基本的枠組みについて整理し（第2節）、それから合格者に関する具体的なデータにもとづき選抜の実態を検討する（第3節）。

1. ブータン高等教育の展開

それではまず、ブータンにおける高等教育の歴史の変遷と全体的な現状について整理することからはじめよう。

ブータンにおいて、近代的な高等教育（tertiary education）は1960年代に導入され、1970年代にかけていくつかのカレッジ、あるいは現在カレッジとして運営されている機関の前身となる教育機関が設立、整備されてきた。そうしたカレッジの1つは、シェルブツェ・カレッジ（Sherubtse College）である。「知の最高峰」を意味する「シェルブツェ」という語を冠するこのカレッジは、1968年に東ブータンのカンルンに設立されたパブリック・スクールを起源としている。1976年には理学系の予科コースを持つジュニア・カレッジに昇格し、1978年には人文科学と商学に関するコースが新設された。その後、1983年にはインドのデリー大学と提携して学位コースを擁するカレッジとなった。そして1986年に初めての学位授与式が挙行政され、人文科学、理学、商学の3つのコースあわせて30人の男子学生に学位が授与された²⁾。

もう1つの特徴的なカレッジとして言語文化学院（Institute of Language and Culture Studies, ILCS）がある。これはもともと、僧院教育的性格を備えた後期中等教育段階の機関として1961年に国の西

部、首都ティンブーからほど近いシムトカに設立された。1989年には、リグチュン・カレッジ (Rigzhung College) へと昇格するとともに、いくつかの文化科目が加えられた課程が用意された。1997年には高等教育機関に昇格して現在の名称となり、35人が新たな課程の学生として入学した。この機関はブータンの文化や伝統、国語であるゾンカ (Dzongkha) の保護、普及を目的としており、ゾンカや歴史の他、仏教に関わる科目 (歌謡と音楽、建築、織布・デザイン、占星学、仮面舞踏、礼法など) が教えられている。そのため、世俗の教員だけでなく、僧侶も教育に携わっている³⁾。なおこの言語文化学院は、2011年に国の中部にあるトンサのタクツェへ移転している。

この時期には、これ以外にも教員養成機関 (サムツェ教育学院 (Samtse College of Education, 1968年に国立教育学院として設立)、パロ教育学院 (Paro College of Education, 1975年に就学前ケア訓練センターとして設立)) や工学系機関 (ジグメ・ナムゲル・ポリテクニク (Jigme Namgyel Polytechnic, 1972年に王立ブータン・ポリテクニクとして設立)), 医学系機関 (国立伝統医学院 (National Institute of Traditional Medicine, 1971年に土着医学訓練センターとして設立)、王立健康科学院 (Royal Institute of Health Sciences, 1974年設立)) が次々と新設された⁴⁾。これらの機関は、現在のブータン高等教育の中核を形成している。

このようにブータンでは長い間、特定の分野に特化したカレッジ (教育機関) の設置を通じて高等教育の整備・拡充が進められてきた。その一方で、国立大学の設立は早くも第4次五ヵ年計画 (1981-1986年) の頃までには構想されていた。1999年に公表された政府文書『ブータン2020 (Bhutan 2020)』では、国のニーズと近隣諸国の人びとのニーズを満たし、ブータンを国際的な知の世界と結びつけ、「センター・オブ・エクセレンス」を作り出す国立大学 (National University) を創設するように始動することが示された。そして、2007年までにそれを実現することが目標とされるとともに、2020年までに世界規模での知のネットワークの一部を形成することがめざされた (Planning Commission, 1999, p.60, p.71)。

2003年、この計画を前倒しして、国王の勅許状にもとづき、既存の10カレッジから構成されるブータン王立大学 (Royal University of Bhutan) が創設された。その目的は、国の人材ニーズを満たす適切さと質を伴った高等教育プログラムを開発して提供すること、国際的文脈における知の創造に貢献し、関連する知のブータンへの導入を促進するために研究を進めることとされている (Royal University of Bhutan, 2010, p.2)。そして、首都ティンブーに置かれた大学本部は全体の調整を行い、全国に分散している構成カレッジがそれぞれの専門分野における教育と研究を担う体制がとられた。

このブータン王立大学は、2011年に王立人事院 (Royal Civil Service Commission) から独立し、自ら運営に責任を負う機関となった。これは同大学が自治的な機関としての大学の機能を与えられたことを意味しており、人員管理、財政、教学などの側面で自由度が増すこととなった。例えば人員管理の面では、教職員は非公務員化され、その雇用や配置、昇進などの最終決定は大学によって行われる。また財政面では、経常経費が学生当たりの経費を基礎とした包括補助金として与えられるとともに、コンサルティングや短期訓練の実施などを通じた自己収入の創出が認められた。その一環として、2011年度から自費生を受け入れることが認められるようになっていく。同年度には入学者全体の10%が自費生になっており、この比率は2013年度までに30%へと高めた後、その比率を維

持することが計画されている。ちなみに2013年度の自費生の場合、年間の学費は人文科学系で6万5,300ニュルタム（約10万3千円、1ニュルタムは約1.58円（2013年9月11日時点））、科学技術系で8万220ニュルタム（約12万7千円）となっている⁵⁾。こうした自費生の受け入れは、学生に国内で教育を受ける機会を提供するとともに、大学に長期的な発展と持続可能性を与えることになると考えられている（Royal University of Bhutan, 2012, pp.1-10）。

ブータン王立大学を構成するカレッジは現在、表1の通りとなっている。また、この大学はインド大学協会（Association of Indian Universities, AIU）のメンバー大学となっており、同大学の学位はAIUによる承認を通じてインドでも認められている。

表1 ブータン王立大学を構成するカレッジと入学定員（2013年度）

カレッジ	所在地	入学定員		
		政府生	自費生	計
科学技術学院	リンチェンデイン	150	45	195
王立伝統医学院	ティンプー	6	2	8
ゲドゥ商業学院	ゲドゥ	391	118	509
自然資源学院	ロベサ	105	25	130
王立健康科学院	ティンプー	50	10	60
ジグメ・ナムゲル・ポリテクニク	デワタン	265	79	344
言語文化学院	タクツェ	330	99	429
パロ教育学院	パロ	240	48	288
サムツェ教育学院	サムツェ	92	30	122
シェルブツェ・カレッジ	カンルン	533	232	765
合 計		2,162	688	2,850

出典：Royal University of Bhutan, “Admission into Tertiary Education Programmes for 2013 Academic Year” (<http://www.rub.edu.bt/images/admission/criteriarub.pdf>, 2013/05/20ダウンロード) より筆者整理。

このように公的セクターの整備・拡充が進められてきたが、2009年にはブータンで初めての私立カレッジとなる王立ティンプー・カレッジ（Royal Thimphu College）が設立された⁶⁾。これは、ブータン王立大学の附属カレッジ（Affiliated Colleges）という位置づけになっている。このカレッジの使命は、適切な費用で国際標準の教育を提供することによってブータンにおける教育の卓越性に貢献すること、学生一人ひとりの成長を促進させること、学生の成長を助ける大学文化を創造すること、新たな観念や知識の集積地となることの4点にまとめられている。2013年度には7つの学位コースが提供されており、学位はブータン王立大学によって授与される。学費はブータン人学生の場合年間10万4,800ニュルタム（約16万6千円）、外国人学生⁷⁾の場合は年間3,600米ドル（約35万8千円）である（2013年度）。

以上のようにブータンでは、特定分野に特化した公立機関を中心に拡充が進められてきたが、近年では、一方ではそれらを統合するブータン王立大学が設立され、しかも自治権が与えられることによって、政府から自立した総合大学として発展するようになっており、他方では私立カレッジの

設立が認められ、ブータン王立大学で自費生の受け入れが始まったこととあわせて、受益者負担原則にもとづく高等教育の拡大が始まっている。同時に、質保証システムの導入や、ブータン資格枠組み（Bhutan Qualification Framework）の策定などを通じて質の向上を図る動きも生じている。

2. 大学入学者選抜制度

次に、ブータンの高等教育進学者がどのように選抜されるのか、その制度枠組みについてまとめよう。大きくまとめればブータンの大学入学者選抜制度は、後期中等教育段階の修了試験と、その成績を基礎として行われる大学による入学者の選抜とに分けられる。

(1) 後期中等教育修了試験

ブータンの学校教育体系は大きく、就学前1年（PP）から第6学年までの初等教育、第7学年から第12学年までの中等教育、そしてそれ以降の高等教育に分けられる。中等教育の6年間は2年ごとに3つの段階に区切られている。初等教育の最終学年（第6学年）と中等教育の各段階最終学年（第8学年、第10学年、第12学年）に全国的な修了試験が実施されている。それぞれ政府によって定められたカリキュラムを基礎に出題されている。このうち大学入学者の選抜にとって重要なのは、第12学年の修了試験（Bhutan Higher Secondary Education Certificate examinations, BHSEC-XII examinations）である。

第12学年の修了試験は現在、ブータン学校試験・評価委員会（Bhutan Council for School Examinations and Assessment, BCSEA）によって実施されている。この段階の試験がブータンで初めて実施されたのは1978年であり、そのときにはインド学校修了試験委員会（Council for Indian School Certificate Examination, CISCE）によって行われ、34人の生徒が参加して25人が合格となった（Ministry of Education, 2005, p.17）。その後、1993年に設置されていたブータン試験委員会（Bhutan Board of Examinations, BBE）が2006年にこの試験の実施を引き継ぎ、2011年の組織再編に伴い、現行のBCSEAによる体制へと移行した。この試験は、ブータン国内のみならず、インド大学協会（AIU）やインド学校教育委員会協議会（Council of the Boards of School Education in India, COBSE）などでも承認されている⁸⁾。

なお、伝統文化やゾンカの保護、普及を目的に設置されている言語文化学院（ILCS）には中等教育段階の課程があり、そこで学ぶ教育課程は他の一般の中等学校（Higher Secondary School, HSS）⁹⁾とは異なって伝統文化に関する科目が含まれている。同様の課程を有する学校が言語文化学院以外にもある。そうした課程を履修する生徒のための第12学年修了試験（現在は「LCSCE XII」と呼ばれる）は1996年からブータン試験委員会（BBE）によって実施されてきた。

現在、第12学年修了試験（BHSEC-XII examinations）の試験科目は、英語（英語Ⅰ、英語Ⅱ）、ゾンカ（ゾンカⅠ、ゾンカⅡ）、リグチュン（Rigzhung）、英文学、歴史、地理、経済学、商業、会計、数学、物理、化学、生物、コンピュータ科学、ビジネス数学の計15科目となっている。これに加えて、上述した伝統文化を学ぶ課程の生徒を対象とする試験（LCSCE XII）があり、チェンジュグ

(Choenjug, 哲学), サムタグ (Sumtag, 仏典文法), ニェンガグ (Nyengag, 詩), ダチュン (Dazhung, ゾンカ文法) といった科目がある。試験は12月に実施され、参加者はそれぞれ8科目受験する。各科目の満点は100点で、40点以上で合格となる¹⁰⁾。これらの試験の成績は、次に述べる大学の入学選抜において重要な指標となるだけでなく、国費派遣留学生の選抜などでも利用されている。

(2) ブータン王立大学による入学選抜

ブータン王立大学では、2003年に同大学が設立された際の勅許状で「学生の大学への入学は成績にもとづき、信仰、出自、性、性的志向、民族を考慮することはしない」(傍点は南部)¹¹⁾ ことが示されている。そして、入学者の選抜は基本的に上述した第12学年修了試験 (BHSEC-XII examinations, LCSCE XII) の成績にもとづいて行われている。

大学全体としては、入学の最低条件として次の2点が定められている。すなわち、第12学年修了試験において少なくとも第12学年で履修した4科目で合格していること、ゾンカがその4科目に含まれていない場合は、ゾンカまたは他言語の科目が第10学年修了の水準に達していることである¹²⁾。そのうえで、各カレッジは当該プログラムの特徴に応じてそれぞれ個別の条件を設定している。表2は、2013年度の選抜においてシェルブツェ・カレッジのいくつかのプログラムについて示された選抜基準である。例えばコンピュータ科学専攻についてみると、大学が定めた上記の最低基準に加えて、数学が100点満点で50点を超え、ゾンカで40点を超えていることが求められている。そして選抜では、数学、物理、ゾンカ、英語とその他1科目の素点をそれぞれ5倍、4倍、1倍、3倍、1倍で重みづけした合計点を算出し、上位から合格者とする。上述したように各科目は100点満点なので、この専攻の場合、換算後の合計点の満点は1,400点となる。

進学希望者の出願は、第12学年修了試験の結果が公表された後、インターネットを通じて行われる。その際、条件を満たせば複数のプログラムに志望することも認められている。ただし自らの志望に順位をつけて出願するため、複数のプログラムで合格となることはない。2013年度の場合、合格者の決定は2013年3月から4月にかけて、カレッジごと、学生種別ごとに分けて行われた。

(3) 王立ティンブー・カレッジの入学選抜

王立ティンブー・カレッジの入学選抜は、ブータン王立大学とは別に行われているが、同大学の場合と同様、入学者の選抜にあたっては第12学年修了試験の成績が用いられている。入学条件は、カレッジ全体の規定として、第12学年の修了試験に合格するとともに英語を含む成績のよい4科目の平均が50点を超えていることとなっており、プログラムによっては追加の条件が設定されている。例えば英語及びゾンカ専攻では、英語とゾンカがともに50点を超えていることが求められている。

出願は、必要な書類を整えたうえで、カレッジへの直接持参、電子メールによる提出、郵送などの方法で行われる。合格者の決定はブータン王立大学に先立って2月中旬から始まる。

表2 シェルプツェ・カレッジの選抜基準 (2013年度, 一部)

	プログラム	適格基準	能力評価点	入学定員	
				政府生	自費生
1	B.Sc. コンピュータ 科学専攻	第12学年修了試験の合格者で、数学 (ビジネス数学を除く)で50%、ゾ ンカで40%を超えているもの	数学—5 物理—4 ゾンカ—1 英語—3 その他1科目—1	49	21
5	B.Sc. 環境科学専攻	(理学系生徒) 第12学年修了試験の合格者で、生物 学と化学でそれぞれ55%を超え、数 学/物理で合格しているもの (人文科学系生徒) 第12学年修了試験の合格者で、地理 と経済学でそれぞれ55%を超え、数 学で合格しているもの	生物学—5 化学—5 英語—3 数学/物理—2 ゾンカ—1 地理—5 経済学—5 英語—3 数学—2 ゾンカ—1	42	18
7	B.A. ゾンカ及び 英語専攻	BHSCE 又は相応試験の受験者 第12学年修了試験の合格者で、英語 とゾンカでそれぞれ60%を超え、リ グチュンで40%を超えているもの 又は 第12学年修了試験の合格者で、英語 とゾンカでそれぞれ60%を超えてい るもの (ILCS 生徒) 第12学年修了試験の合 格者で、4つの中核科目—ダチュン、 サムタグ、チェンジユグ、ニエンガ グ—の合計で55%を超え、英語で 60%を超えているもの	ゾンカ—5 英語—5 経済学—3 地理—3 リグチュン—1 又は ゾンカ—5 英語—5 経済学—3 地理—3 その他1科目—1 (ILCS 生徒向け) チェンジユグ—3 サムタグ—3 ニエンガグ—3 英語—5 ダチュン—5	49 34 15 (ILCS)	21 (BHSCE 又はそれ に相当す る試験)
10	B.A. 歴史及び ゾンカ専攻	(人文科学系生徒のみ) 第12学年修 了試験の合格者で、歴史で60%、英 語で55%、ゾンカで60%を超えてい るもの	歴史—5 英語—4 ゾンカ—5 その他2科目—1	49	21
12	B.A. メディア研究 及び英語専攻	第12学年修了試験の合格者で、英語 で65%、ゾンカで55%を超えてい るもの	英語—5 ゾンカ—5 その他3科目—1	24	11

出典：Royal University of Bhutan, “Admission into Tertiary Education Programmes for 2013 Academic Year” (<http://www.rub.edu.bt/images/admission/criteriarub.pdf>, 2013/05/20ダウンロード) より筆者整理。

3. 選抜の実態

それでは、こうした選抜の結果、どのような学生が選ばれているのだろうか。本節ではブータン王立大学における2013年度合格者一覧（2013年3月11日公表）¹³⁾をデータとして、選抜の実態を具体的に検討したい。対象となる合格者はあわせて2,605名である。なお、王立ティンパー・カレッジの合格者に関するデータは入手できなかったため、本節での分析には加えていない。

ブータン王立大学では合格者一覧を、各カレッジのプログラムごとに入学通知に添えて大学のホームページ上で公表している。入学通知の部分には、入学手続き、準備すべき書類や携帯品、納付すべき費用（大学建設費、学生寮費、自費生の学費）についての説明が書かれている。それに付されている合格者一覧には、順位、現浪別（現役卒業生か過年度卒業生か）、氏名、性別、ID番号、卒業中等学校（HSS）、学生種別（政府負担学生か自費生か）、得点といった合格者の個人情報が含まれている¹⁴⁾。

それではまず、合格者の性別から確認しよう。2,605名の合格者のうち、男子は1,480名（全体の56.8%）、女子は1,125名（同43.2%）だった。2012年の統計では、ブータン全体で第12学年の生徒は48校の中等学校（HSS）に7,858名在籍していたが、内訳は男子生徒が4,284名、女子生徒が3,574名であった¹⁵⁾。男子生徒の比率は54.5%であり、合格者全体の性別分布はこれとほぼ同じである。カレッジ別に見ると、男子の比率が顕著に高いのはジグメ・ナムゲル・ポリテクニク（男子の比率は73.2%）、科学技術学院（同71.6%）など自然科学系機関であり、看護や助産に関するコースが設置されている王立健康科学院では逆に男子の比率が低い（同42.4%）。

次に、現浪別分布を確認する。合格者一覧には現役の卒業生であることが「Regular」と示され、過年度卒業生であることは「Supplementary」、「Past-year」という語で表されている。過年度生には、例えば政府系機関で一定年数以上の勤務経験を持つ在職者が派遣されるようなケースも含まれている。このような者であっても選抜の対象となる¹⁶⁾。これらの語が与えられている2,562名について現役生か過年度生かを見ると¹⁷⁾、現役生が1,908名、過年度生が654名であった。現役生の占める比率は74.5%である。カレッジ別では、国立伝統医学院は6名の合格者がすべて現役生であり、科学技術学院では90.8%、自然資源学院では88.1%、王立健康科学院では86.0%が現役生となっている。一方、ゲドゥ商業学院の現役生は63.2%にとどまり、サムツェ教育学院でも現役生の占める比率は68.9%となっている。

さらに、政府負担学生（以下、政府生と略）か自費生かに注目すると、2,605名のうち政府生が2,157名（全体の82.8%）、自費生が448名（同17.2%）となっている。表1からもわかるように、計画ではあわせて688名、入学定員の24.1%を自費生として受け入れるとされていたが、実際には、全体として自費生の合格者数が計画より少なかったことにより、政府生がより大きな比率を占める結果になっている。一方、カレッジ別の分布状況は表3の通りである。この表は、カレッジによっては結果的に予定よりも自費生の比率が高い場合もあればかえって低くなる場合もあることを示している。詳しく見ると、王立伝統医学院を除いて、入学定員が大きいカレッジでは合格者総数に占める自費生の比率が計画より小さくなる傾向があることがわかる。

表3 政府生と自費生 (2013年度)

カレッジ	入学定員における 自費生の比率	合格者 (結果)			
		合計	政府生	自費生	自費生比
科学技術学院	23.1(45/ 195)	197	150	47	23.9
王立伝統医学院	25.0(2/ 8)	6	6	0	0.0
ゲドゥ商業学院	23.2(118/ 509)	505	391	114	22.6
自然資源学院	19.2(25/ 130)	136	109	27	19.9
王立健康科学院	16.7(10/ 60)	59	49	10	16.9
ジグメ・ナムゲル・ポリテクニク	23.0(79/ 344)	313	262	51	16.3
言語文化学院	23.1(99/ 429)	365	331	34	9.3
パロ教育学院	16.7(48/ 288)	270	231	39	14.4
サムツェ教育学院	24.6(30/ 122)	124	92	32	25.8
シェルブツェ・カレッジ	30.3(232/ 765)	630	536	94	14.9
合 計	24.1(688/2,850)	2,605	2,157	448	17.2

注：「入学定員における自費生の比率」欄は「比率（自費生定員／定員総数）」を示している。

政府生・自費生別に現役生か過年度生かを見ると、政府生では現役生が75.5%を占めるのに対し、自費生では現役生が占める比率は69.4%となっている。

続いて、合格者の成績に着目する。合格者一覧に示されている各自の得点はプログラムごとに定められた基準で換算した後のものなのでそのまま比べることはできないが、上述したように換算後の満点は計算できるので、満点に対する比率、すなわち得点率として相互に比較することは可能である。表4は、各カレッジで政府生、自費生として合格した者の得点率の最高と平均、最低をまとめたものである。王立健康科学院やジグメ・ナムゲル・ポリテクニクでは学位プログラムが提供されておらず、そのことが最高の得点率が他のカレッジに比べてやや低い結果になっていると考えられるが、それも含めてカレッジによって得点率の分布には相違があることがみてとれる。

最後に、出身学校を見ると、合格者数が最も多いのはウゲン・アカデミー (Ugyen Academy) 中等学校で全体のほぼ1割に当たる258名を輩出している。これに続くのは、ニマ (Nima) 中等学校 (合格者数は167名。以下同じ)、ヤンチェンブグ (Yangchenphug) 中等学校 (150名)、言語文化学院 (ILCS) (123名)、リンチェン (Rinchen) 中等学校 (117名)、クエンガ (Kuengaa) 中等学校 (105名) などである。このうち、ヤンチェンブグ (Yangchenphug) 中等学校と言語文化学院 (ILCS) の2校を除く4校は私立である。私立校は規模が比較的大きく、その結果として一部の学校で多くの合格者を出すことになっている。また、上記6校に続く4校を加えた上位10校で合格者全体の50.7%を占めており、合格者が少数の中等学校に集中する状況がある。ただし同時に、2012年度に第12学年の生徒が在籍していた中等学校はすべて合格者を出していることにも注目すべきであろう。合格者数の2012年度第12学年生徒数に対する比率は、最も高い98.1% (ナンゴル (Nangkor) 中等学校) から最も低い3.2% (プリンス・ナムゲイ・ワンチュク (Prince Namgay Wangchuk) 中等学校) まで大きな幅があるものの、このことは、程度の差はあるにしろ、各中等学校はいずれも高等教育へつなが

表4 合格者の得点率（カレッジ別，政府生・自費生別）（％）

カレッジ	政府生			自費生		
	最高	平均	最低	最高	平均	最低
科学技術学院	85.6	75.3	71.1	74.8	67.4	54.2
王立伝統医学院	80.4	79.1	77.9	-	-	-
ゲドゥ商業学院	88.3	75.0	70.6	70.5	67.4	64.9
自然資源学院	76.5	64.3	59.8	66.5	58.2	52.8
王立健康科学院	68.3	63.4	61.2	56.9	55.3	54.0
ジグメ・ナムゲル・ポリテクニク	71.4	61.9	56.9	56.9	51.8	43.1
言語文化学院	79.3	64.0	54.9	61.2	56.8	52.3
パロ教育学院	81.6	65.2	53.0	70.7	62.6	59.2
サムツェ教育学院	75.7	64.9	61.7	62.2	58.8	54.5
シエルプツェ・カレッジ	87.2	66.9	53.7	68.7	59.4	51.7

るルートに位置づけられていることがわかる。

おわりに

ブータンは、「国民総幸福」（GNH）を掲げて「近代化」に向けた国家建設を進める中で、個別に設置されていたカレッジを統合して総合大学であるブータン王立大学を創設したり、自費生の承認や私立カレッジの設置認可を通じて受益者負担原則にもとづく高等教育の拡大を図ったりしてきた。そのように拡大しつつある高等教育に受け入れる新入生の選抜では、後期中等教育段階（第12学年）の修了を前提としつつ、大学として統一の条件に加えてそれぞれのプログラムが求める人材に沿った選抜基準を設定し、成績（得点）のよい者から順番に合格とするしくみがとられている。選抜の実態を具体的なデータで確認すると、入学定員の規模や専門分野の特徴と関連していると考えられるが、カレッジによって男女の比率や現役生と過年度生の比率、得点率の分布などには違いがあること、また少数の中等学校の卒業生が合格者の多くを占めると同時にすべての中等学校が合格者を輩出していることが明らかになった。すなわちブータンでは、「優秀さ」が基本的に試験の成績で測られる制度において、どのカレッジに入学を希望するかによって求められる学力の水準が結果として異なり、中等学校間には進学率という点で大きな相違が存在しているのである。

本稿では、ブータンにおける大学入学者選抜のしくみをまとめるとともに、選抜の実態の一端を明らかにした。後期中等教育段階の修了試験の成績を用いた選抜という点で大学入学者選抜制度は基本的に一貫しているが、社会が急速に変化し、高等教育が量的に拡大する中で、それが果たす役割や社会的認識がどのように変わりつつあるのか、さらに踏み込んだ分析が必要である。この点を今後の課題としたい。

【注】

- 1) こうした見方の前提となっているのは、ドーアの「後発効果」論である（ドーア，1978年）。
- 2) 以上の記述は，“Sherubtse History”（<http://www.sherubtse.edu.bt/?q=Sherubtse-history>，2013年9月12日最終確認）による。
- 3) 以上の記述は，杉本（2000）及び“ILCS”（<http://www.ilcs.edu.bt/index.php/aboutus>，2013年9月12日最終確認）による。
- 4) 以上のカレッジの設立に関する情報は，ブータン王立大学ホームページ内の各カレッジ紹介ページ（<http://www.rub.edu.bt/index.php/colleges/constituent-colleges>，2013年9月12日最終確認）による。
- 5) 世界銀行のデータによれば，ブータンにおける人口1人あたり GNI は2,420米ドル（2012年）である。これはおよそ日本（47,880米ドル，2012年）の20分の1に相当する。
- 6) 王立ティンプー・カレッジに関する以下の記述は，同カレッジのホームページ（<http://www.rtc.bt/>，2013年9月12日最終確認）による。
- 7) 外国人学生のうち，南アジア地域協力連合（South Asia Association for Regional Cooperation; SAARC）加盟国から来た学生については，学費はブータン人学生と同額とされている。
- 8) このようにブータンの中等教育修了試験の成績がインドにおいても承認されていることは，ブータン人学生によるインドの大学への進学をより容易にすると考えられる。この点は国境を越えた学生移動を考えるうえで興味深い。
- 9) Higher Secondary School はブータンでは第12学年の課程までを有する中等学校を指している。中等学校にはこれ以外にも第8学年までの課程を置く Lower Secondary School や第10学年までの課程を置く Middle Secondary School もあるが，本稿では中等教育と高等教育の接続部分に焦点を当てることから，Higher Secondary School の訳語として「中等学校」を用いている。
- 10) 2012年9月24日に言語文化学院（ILCS）で同校の Ngawang 氏（Dean, Research & External Linkages）に対して行ったインタビューによる。
- 11) 勅許状は“The Wheel of Academic Law”（<http://www.rub.edu.bt/regulation/>，2013年9月13日最終確認）で確認することができる。
- 12) 同上“The Wheel of Academic Law”による。
- 13) 各カレッジのプログラムごとに公表されている合格者一覧のデータ（<http://www.rub.edu.bt/index.php/news-a-events/156-results>）を2013年5月20日にダウンロードし，その統合データを作成した。なお，Ngawang 氏に対して行ったインタビュー（前掲）によれば，合格者の中には海外留学が決まったとか，職が見つかった，在職の合格者が進学条件を満たせなかったといった理由で入学を辞退する者がおり，そうした入学辞退者の存在はカレッジにとって課題になっているという。
- 14) Ngawang 氏に対して行ったインタビュー（前掲）によれば，インターネットで合格者の発表を行うのは全国の志願者に公平に情報を伝えるためであり，個人情報を含む情報を公表するの

は合格者決定の公平性や全体のバランスを明確にする意図があるという。

- 15) ブータンで公表されている教育統計 (Policy and Planning Division, 2012) には学校の学年別、性別の児童生徒数が掲載されているが、この中には言語文化学院を含む伝統文化を含む課程を提供している学校は見当たらない。そのため、ここで挙げている学校数 (48校) やその生徒数 (7,858名) にはこれらの学校の統計は含まれていない。
- 16) Ngawang 氏に対して行ったインタビュー (前掲) による。
- 17) 現役卒業生か過年度卒業生かを示す欄にはこれらのほかに「Private」という語が見られる。ただ現時点ではこの語が何を意味するのか不明であるため、該当する38名は分析対象から除外している。同様に、この欄に外国の学校名が記されている4名 (3名はインドの学校, 1名はオーストラリアの学校) と未記入の1名も分析には加えていない。

【参考文献】

- 上田晶子 (2006) 『ブータンにみる開発の概念—若者たちにとっての近代化と伝統文化』明石書店。
- 杉本均 (2000) 「ブータン王国における公教育と青年の意識：伝統と近代」『ヒマラヤ学誌』第7号, 11-31頁。
- R. P. ドーア (松居弘道訳) (1978) 『学歴社会：新しい文明病』岩波書店。
- 南部広孝 (2012) 「ブータン—『近代化』の波が押し寄せる『幸福の国』」北村友人・杉村美紀編『激動するアジアの大学改革—グローバル人材を育成するために』上智大学出版, 183-195頁。
- Gross National Happiness Commission, Royal Government of Bhutan. (2009). *Tenth Five Year Plan: 2008-2013*, Gross National Happiness Commission (<http://www.gnhc.gov.bt/five-year-plan/>, 2013年9月12日最終確認).
- Ministry of Education, Royal Government of Bhutan. (2005). *General Statistics 2005*, Ministry of Education.
- Planning Commission, Royal Government of Bhutan. (1999). *Bhutan 2020 (PartII)*, Planning Commission (<http://www.gnhc.gov.bt/2011/05/bhutan-2020-a-vision-for-peace-prosperity-happiness-2/>, 2013年9月12日最終確認).
- Policy and Planning Division, Ministry of Education. (2012). *Annual Education Statistics 2012*, Policy and Planning Division, Ministry of Education.
- Royal University of Bhutan. (2010). *Prospectus 2010-11*, Royal University of Bhutan.
- Royal University of Bhutan. (2012). *Annual Report 2011*, Royal University of Bhutan (http://www.rub.edu.bt/images/key-documents/annual-reports/annual_report_2011.pdf, 2013年9月12日最終確認).

The University Admission System in Bhutan

Hiroataka NANBU *

The Kingdom of Bhutan, located in South Asia, four decades ago adopted “Gross National Happiness (GNH)” as the principle of nation building. It has started building a “modern nation” and has strengthened links with global networks, especially since the end of the 20th century. In this process, priority has been given to the expansion of tertiary education by establishing the Royal University of Bhutan in 2003; approving the University to admit self-finance students; and approving building a private college as an affiliated college of the University. The purpose of this article is to clarify the framework of the university admission system in Bhutan and to analyze the actual results of selection under this system in the changing social circumstances.

Bhutan has a national examination system, including examinations for classes six, eight, ten, and twelve. The examination for class twelve is now conducted by the Bhutan Council for School Examinations and Assessment. Admission of students to the University is generally based on the results of the examination for class twelve. All programs in the colleges have their own special admission requirements on the basis of common minimum requirements set by the University. Analysis of the 2013 admission selection reveals that the male-female ratio of selected students; the ratio of new graduates from higher secondary schools to selected students; and a range of examination results vary between colleges, and that all of 48 higher secondary schools have produced many or some selected students, while the graduates from only 10 higher secondary schools have occupied over 50% of all selected students.

* Associate Professor, Graduate School of Education, Kyoto University